

1. 音響材料協会、音響技術の歴史と現状

1.4 200号記念特集号の企画にあたって： 音響技術1972年～2022年の50年

音響技術・編集委員長 井上 勝夫

季刊専門誌「音響技術」は、本号をもって記念すべき200号を数えました。これは一重に音響材料協会の役員の方々や同誌編集委員会委員の方々、各記事の執筆に当たってくださった多くの方々、更には同誌の読者の方々のお陰と深く感謝するとともに、編集委員会を代表して心より感謝とお祝いを申し上げます。

「音響技術」は季刊誌として発行されておりますので、200号ということは年月に換算すると、半世紀・50年ということになり、あまりの継続時間の長さに驚かされます。50年間に渡る「音響技術」の編集委員会名簿を表1に纏めてみました。この名簿を見ると、初代から現在で23代目の編集委員会となりますが、各代の委員会とも各専門分野の著名な方々が委員になられており、刊行当初から本誌の重要性を伺うことができます。このような歴史ある雑誌の記念すべき号の発行時期に編集委員長を仰せつかっておりましたことは、私にとって、この上ない喜びでありますと共に、同誌の将来に渡る質の向上への配慮及び継続刊行の実現などの面で、責任の重さをあらためて感じさせられます。

「音響技術」は、建築音響に関わる学術研究と実現場技術の中間に位置し、研究成果を如何に早く、具体的な技術として業界に反映させるかという重要な役割を担っている、言わば建築音響臨床学研究報告集とか建築音響技術報告誌と位置付けられるものと受け止められ、研究者や建築技術者・音響技術者、行政担当者等から高い評価を受けております。今回は記念誌なので、通常の「特集に当たって」の記事内容を超えて、本誌に関わる歴史の一端を紹介してみたいと思います。

発行元の(一社)日本音響材料協会は、昭和28年2月に設立されて、今年(令和4年2月)で満69歳を迎えましたので、来年2023年2月には70歳を迎えることとなります。私の生まれは昭和25年ですので、丁度、私は音響材料協会とともに歩んできたということになります。音響材料協会の定款(昭和51年3月改正)をみると、

第3条(目的)で「音響材料の生産業、販売業およびその関連工事業の健全なる発達をはかることにより、わが国産業の発展に寄与する」とあり、第4条(事業)では、目的達成のために行う事業として10項目を掲げております。具体的な継続事業として「会誌等の刊行、頒布」や「講演会、講習会、研究会、座談会、懇話会、見学会等の開催」が挙げられており、その具体的事業として「音響技術の発刊」が位置付けられております。

会誌の発行に関する歴史を振り返ってみますと、先ず、昭和28年に協会設立後、翌年昭和29年2月から「音響材料」と命名された会誌が刊行されたのが始まりです。この会誌は18号までで昭和38年1月に打ち切られております。その後、2年ほどの空白がありましたが、昭和40年3月から新たに「建築音響」と名称を改め、昭和46年11月まで、22号の会誌が刊行されております。そして、昭和47年4月からは、現在のタイトル「音響技術」に改められ、現在に至るまで49年間、200号(令和4年12月まで)が継続して刊行されております。途中2度の名称変更がありましたが、その時代の専門分野や業界の状況・ニーズにマッチさせることを理由として改名されたものと考えられます。途中、多少のブランクはあるものの、会誌は全体で67年間、240号に及び、研究者や技術者、行政担当者などのユーザーにとって確かな専門誌として位置付けられてきたものと高く評価されています。

前述したように、「音響技術」は学会誌などの学術分野の内容と一般紙の内容の中間に位置付けられ、専門的・実用的・具体的内容を容易に解説・表現することを基本とした専門誌であるため、大学院生や建築技術者等に親しまれ、音響技術者育成にも大きく寄与・貢献してきた雑誌であります。現に、筆者も同紙から多くの知識や情報を得て育ってきた1人(まだ育ったなどとは言えませんが・)であります。

現在、音響技術は1号から187号までがDVD化され1枚にまとめられており、使いやすい情報源となっているので利用度の高い「文献集」と言えるでしょう。

最近の「音響技術」の内容を見てみますと、業界からのニーズに応えるテーマで特集が組まれているように感じられます。すなわち、音源別の制御技術というより、建物の総合的な音環境を扱う特集やトラブル・紛争・法規制などに関わる特集、他の建築性能との関わりなど、建築や都市環境を対象とした空間性能の中の音環境性能、音環境に関わるトラブルの防止などが目

1.4 200号記念特集号の企画にあたって：音響技術1972年～2022年の50年

に付きます。各時代に即したテーマを掲げ、すぐに利用できる知識や技術をユーザーに与えることのできる本誌の目的は今後も継続して行くべきと思っております。学術誌に掲載される先端理論や技術を判りやすい言葉や言い回しで表現し、所謂、臨床音響学的分野に立った視点から、事例を豊富に掲載・紹介する「音響技術」の姿勢は、今後も貫いて行っていただきたいと思っております。その経過情報を図1にまとめてみましたが、この結果をみても、特に最近の10年間をみると明確なように、各号の内容が全体に及ぶ、すなわち特集のテーマが、建物ごとの切り口から問題点を切り口とする、解明するような特集に変化してきている傾向が明確に示されています。192号の「会議と音」や197号の「音とスポーツ」、198号の「With・Afterコロナと音環境」などは良い例です。

音響技術の出版と関連して、特に「講習会」の開催も表2に示すように精力的に行われてきました。開催状況を記録から振り返ってみますと、1975年(昭和50年)3月に「遮音JIS解説講習会(大阪)」が開催されたのを下輪切りに、ほぼ毎年、全体で45回を数える講習会が、その時代に対応した「音響技術」をテーマとして開催されてきました。但し、ここ3年間についてはコロナ感染症拡大予防措置のため、面前参集による講習会は中止しております。この講習会開催においても、テキストとして音響技術の「特集記事」が中心的に利用されるなど、教育・技術者育成に大きく貢献してきたと言えるでしょう。また、毎回の受講者数は、各時代のニーズにもよりますが、100名を超える場合が多く、他の同様な講習会の参加者に比べると群を抜く盛況ぶりであり、同講習会の質の高さと着眼点の適正さが評価されてきました。ちなみに、これまでの講習会のうち記録のある29回分(昭和53年～平成21年)の参加者を集計してみたら、3,043名に達することが分かりました。平均でも100名を超える受講者が参加していたこととなります。

近年、建築技術も一応の成熟期に達しているとも言われていることや、情報の収集・入手にインターネットや出版図書の氾濫、景気の低迷などによって、講習会等への参加者も激減状況にあります。音響材料協会の講習会は確実な評価を得ておりますので、講習会の内容や方法について再検討を加えながら、技術者育成、情報交換提供の場として継続実施して行くことが望まれます。

今後も「音響技術」は学術的レベルを落とすことなく、研究成果を判り易く平易に解説した内容とし、音響技術者や建築技術者、行政担当者、大学院生などに具体的技術・情報の提供を目的として継続刊行されることを切に望むものであります。さらに、音響技術の内容を具体的に解説した講習会の開催も是非、継続実施され音響技術者の養成・技術の向上にも貢献していただきたいと思っております。

また、冒頭の理事長挨拶にも記載されていますが、表3に一覧表を示すように、単行本等の出版事業も昭和60年ころまでは精力的に行われてきましたが、それ以降は、ニーズの減少や同専門分野が成熟期に達したせいなのか定かではありませんが、影をひそめる状況となり、再度の事業活動・活性化が望まれます。そのきっかけとなることを願い、2020年12月に「集合住宅のリフォームと音」(共著：委員長：井上勝夫)と題する書籍を出版しました。本書籍は全348ページで構成され、共同住宅のリフォームの類型ごとに留意すべき音響的ポイントや技術的対応方法などを分かり易く解説した内容であり、初心者にも理解しやすいように配慮されています。是非、ご一読いただくと共に、これをきっかけとして、今後、音響材料協会が出版活動も活発に行うことを願うものです。

ところで、今回の特集は200号を記念して、音響材料協会の重要な設置目的の1つである「技術に関する研究・指導」を踏まえ、音響設計法の基礎として用語、測定法、評価法の解説記事をまとめると共に、音響設計法を音源別に捉え、既往の技術を振り返り、対策フローとして流れを捉えた計画方法をまとめることを目的に、音響性能が重要な「事務所建築」、「コンクリート系集合住宅」、「木質系共同住宅」および「公共空間(建築物)」を対象に、専門家、技術者による座談会を開催しました。本特集では、建物の設計・建設に際して必要、重要事項を纏めておりますので、是非、ご一読いただき、今後の参考として活用いただければ幸いです。